



デンマーク語における副次強勢の起源について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2015-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Danish, secondary stress, late 18th and 19th centuries, stress shift, Sandnes Norwegian 作成者: 三村, 竜之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3785

デンマーク語における副次強勢の起源について

その他（別言語等） のタイトル	On the Origin and Development of Secondary Stress in Danish
著者	三村 竜之
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	64
ページ	109-120
発行年	2015-03-13
URL	http://hdl.handle.net/10258/3785

デンマーク語における副次強勢の起源について

三村 竜之*¹On the Origin and Development of
Secondary Stress in DanishTatsuyuki MIMURA*¹

(原稿受付日 平成 26 年 6 月 27 日 論文受理日 平成 27 年 1 月 22 日)

Abstract

This study aims at empirically examining the origin and the historical development of secondary stress in morphologically simple words in Danish. There have been few remarks made on the diachronic aspect of the stress contour of those simplexes, and I will argue that the 'primary-secondary' stress pattern of those words has been historically developed from the 'weak-primary' pattern which those simplex words originally had as the result of accent change based on the following three grounds: i) documented records found in the literature and several dictionaries compiled around the late 18th and 19th centuries; ii) data from other Scandinavian dialects; iii) free variations of the two stress patterns, 'primary-secondary' and 'weak-primary', found in the present-day Danish. From the above argument, it will be concluded that all of those simplex words are etymologically loanwords with 'weak-primary' stress pattern, and their original primary stress is supposed to have moved to the initial syllable in accordance with the native Nordic/Germanic stress pattern; thus, the secondary stress in the present stress pattern is a surviving trace of the primary stress in an archaic 'weak-primary' pattern.

Keywords: Danish, secondary stress, late 18th and 19th centuries, stress shift, Sandnes Norwegian

1 序

1. 1 本研究の背景と目的

デンマーク語は、英語やドイツ語などその他のゲルマン諸語と同様に、ストレスアクセントの言語であり、語は主強勢を担う音節を必ず一つ有する。ほとんどの単純語（単一の形態素からなる語；形態素境界を内在しない語）は主強勢を一つ有するのみであるが、主強勢の他に副次強勢も有し、全体として「主強勢+副次強勢」という強勢の型を有する単純語も、僅かではあるがデンマーク語に存在することが報告されている⁽¹⁾⁽²⁾。

この「主強勢+副次強勢」という型は、実は複合

語において典型的に観察される強勢型であり（第 2.1 節を参照）、従って、この点で「主強勢+副次強勢」という型を有する単純語は、その形態論的な特性に反する韻律的振る舞いを示すという意味で極めて特異であると言えることができる。

このような「主強勢+副次強勢」という型を有する単純語を、これまで筆者は「韻律的複合語」と呼んできたが（第 2.2 節を参照）、この韻律的複合語の特異性の背後に存在するであろう史的側面に関しては、管見に及ぶ範囲では、これまで言及してきた先行研究は皆無に等しい。そこで本稿では、17 世紀から 18 世紀にかけて編纂並びに出版された研究書や辞書における記録資料や、筆者自身が行ったフィールドワークを通じて採取した一次資料をに基づいて考察を行い、韻律的複合語に現れる「主強勢+副次

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

強勢」という型が史的变化の結果産み出されたものであると推定することが可能であることを主張する。

1. 2 デンマーク語について

1. 2. 1 概要

デンマーク語は、英語やドイツ語と同じくインド・ヨーロッパ語族のゲルマン語派に属し、ノルウェー語やスウェーデン語、アイスランド語、フェロー語(Faroese)とともに北ゲルマン(ノルド)諸語を成す。

話者人口は、自治権を有する領土であるフェロー諸島とグリーンランドを除く、いわゆる「本土」に相当する国土に限定すると、2014年1月の時点で約560万人(出典: <http://www.statistikbanken.dk>)と推定される。

なお、公用語としての位置付けではないが、国境を接するドイツ連邦共和国の北部にも話者が確認されている。また、かつてデンマーク王国の支配下にあったアイスランド共和国では1999年まで第一外国語(必修科目)として位置づけられていたため、デンマーク語を解する人々は(アイスランド語とデンマーク語の類型論的な類似性の低さを考慮すると)比較的多いと言えよう。

1. 2. 2 デンマーク語のアクセント

既に触れたように、デンマーク語はストレス(強さ/強弱)アクセントの言語である。従って、語は必ず主強勢を担う音節を一つ有する。

デンマーク語のストレスアクセントは、例えば *August*「アウグスト【人名】」と *augúst*「八月」の対や、*billard*「ビリヤード」と *billiárd*「千兆の」、*stándard*「基準」と *standárt*「旗」のような対が示すように、いわゆる「弁別的機能」は有するものの、語中の主強勢の位置の違いのみで知的意味が弁別される最小対の例は極めて少なく、従ってデンマーク語のストレスアクセントの弁別力は極めて低い。むしろ、デンマーク語のストレスアクセントは、機能的には、語に一ヶ所存在する主強勢が語のまとまりを明示する、換言すれば主強勢の数が語(厳密にはアクセント上のまとまり、あるいは「アクセント単位」)の数を明示する働き(伝統的な用語では「頂点表示機能」)を有していると言えよう。

ゲルマン祖語やノルド祖語から受け継いだ、いわゆる固有語は、基本的に一音節語ないし二音節語であるため語中の主強勢の位置は高い確率で予測可能であるが、(特にロマンス系の)外来語や多音節語も

考慮に入れると、主強勢の位置は必ずしも規則による一般化が可能ではなく、飽くまで傾向性を指摘できるに過ぎない。その一方で、語の主強勢の位置は、語の長さ(音節数)を問わず、必ず後ろから数えて三つ目までの音節の何れか(末尾音節、次末音節、前次末音節)にのみ置かれる⁽³⁾。

デンマーク語では、英語などその他のゲルマン語と同様に、強勢の所在と当該音節の構造(音節量)との間には緊密な相関関係が存在し、短母音開音節構造を有する音節(CV音節)は強勢を担う音節としては不適合である⁽⁴⁾。

1. 3 本研究の資料

本稿において引用する資料は、先行研究のものを除き、全て筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料である。

本研究の対象である「韻律的複合語」、つまり「主強勢+副次強勢」という型を伴う単純語の資料は、2005年から2009年にかけて断続的に行ってきたフィールドワークを通じてその一部は既に採取済みであった。その後、資料の補充と拡充を目的として、発音辞典(Molbæk Hansen (1990); 見出し語41102語を収録)を基に作成した47項目からなる調査票を用いて、2013年に再び実地調査を実施した。

本研究に関わる資料の採取の際に尽力して下さったインフォーマントは以下の方々:

(1) a. Martin Graugaard Hause 氏 (男性)

1980年ユトランド半島(Jylland)北西部 Struer の生まれ

b. Lise Schou 氏 (女性)

1962年 Jylland 南西部の Esbjerg の生まれ。20歳頃にコペンハーゲン(København)に移る。

c. Evi Egholm 氏 (女性)

1973年 Jylland 北部の Lemvig の生まれ。生後間もなくフューン島(Fyn)のオーデンセ(Odense)に移り19歳まで同地に居住の後、Københavnに移る。

なお、2013年の調査ではインフォーマントはEgholm氏のみである。

(1)に示した方々は、皆、いわゆる「地方出身者」に相当する方々である。しかし、実際の調査において教えて下さった発音は各々の出身地の方言的特徴を幾分かは窺わせるものの、報告された語それ自体はKøbenhavnの方言を基盤とするいわゆる標準方言のものとの差異は確認されなかった。以上から、本研究で扱うデンマーク語は、いわゆる地域共通語的な

表 1: デンマーク語における接辞と強勢型に及ぼす影響 (Mimura 2009: 209)

	Inflectional	Derivational		
Prefix		<i>be-: bestíge</i> <i>er-: erkénde</i>		<i>af-: áftale</i> <i>sam-: sám tale</i> <i>und-: únd tage</i> <i>u-: úheld</i> <i>mis-: místænke</i>
Suffix	<i>-ede: lúkkede</i>	<i>-skab: ágteskab</i>	<i>-isk: européisk</i>	<i>-itet: humanítét</i>
	<i>-en: avísen</i>	<i>-dom: álderdom</i>	<i>-sk: japánsk</i>	<i>-ist: telefoníst</i>
	<i>-e: húse</i>	<i>-hed: rígtighed</i>	<i>-er: européer</i>	<i>-eri: bagerí</i>
	<i>-e: økonómiske</i>	<i>-agtig: dámeagtig</i>	<i>-ig: uhéldig</i>	<i>-isme: marxísme</i>
	<i>-er: génnemser</i>	<i>-ig: kúnstig</i>	<i>-lig: misúndelig</i>	<i>-agtig: barnágtig</i>
	<i>-t: normált</i>	<i>-som: vóldsom</i>	<i>-som: opfíndsom</i>	
	Stress-neutral		Stress-shifting	Stress-bearing
				Stress-affecting

変種と捉えて差し支えないと言える。

2 デンマーク語における副次強勢と語構造

2.1 複合語と派生語

これまでの筆者の調査から、デンマーク語における副次強勢には、以下に示す三種類の語においてのみ現れることが確認されている: (i) 複合語、(ii) 派生語、(iii) 単純語の一部 (いわゆる「韻律的複合語」)。

まず複合語における副次強勢について詳しく見ることにする。デンマーク語の複合語は、品詞の別や構成要素の数、複合語内部の構造(「右枝分かれ構造」か「左枝分かれ構造」)の別を問わず、原則的に以下に示す規則により複合語全体の強勢型を導くことが可能である⁽⁵⁾。

(2) 複合語アクセント規則

The primary stress of the first immediate constituent appears as the primary stress of a whole compound, and the secondary stress of a whole compound is derived from the primary stress of its second immediate constituent.*²

つまり、複合語における副次強勢とは、(いわゆる「直接構成素」に分析した際の) 後部要素 ([A[BC]] という内部構造であれば BC が、[[AB]C] という内部構造であれば C がこれに相当) が単独形で有する主強勢が複合語のレベルにおいて実現したものである、と

*2 具体例は前掲拙論、あるいは三村(2008: 294-295)⁽²⁾等を参照されたい。

言うことができる。

続いて、派生後形成における副次強勢について概観する。デンマーク語の派生接辞には接頭辞と接尾辞の二種類があり、それぞれ、語幹の強勢型や派生語全体の強勢型に作用する働きの点から、以下に示す三つのグループに分類される(表 1 を参照⁽⁵⁾; 表の黒塗り部分は該当する接辞が存在しないことを示す) :

- (3) a. 語幹の主強勢に影響を与えない接辞 (stress-neutral affixes)
- b. 語幹の主強勢を語幹内部で移動させる接辞 (stress-shifting affixes)
- c. 自身で主強勢を担う接辞 (stress-bearing affixes)

上述の二つの「種類」(接頭辞か接尾辞か) と三種の「機能」から論理的に導かれる六種類の接辞の内、デンマーク語には五種類が存在し、その内、「語幹の主強勢に影響しない接尾辞」の一部のみが派生語全体の副次強勢を担う。以下に具体例を示す⁽⁵⁾ (ハイフンは形態素境界を示す; 以降、強勢を担う音節の母音を大文字で、また主強勢を担う音節の母音はさらにアクセント記号を付して表わすことにする; また必要に応じて[:]にて長母音を示す) :

- (4) a. (i) *betÁl-bA[:]r* 「支払可能な」
cf. *betÁle* 「支払う」
- (ii) *mÉnneske-hEd* 「人類」
cf. *mÉnneske* 「人間」
- (iii) *vÍden-skAb* 「科学」
cf. *vÍden* 「知識」

- b. (i) *bÁ[:]rn-lig* 「子供っぽい」
 cf. *bÁ[:]rn* 「子供」
 (ii) *befrí-else* 「解放」
 cf. *befrí* 「解放する」

なお、上記 (4a) に示した派生接尾辞は、全て完全母音(full vowels)を有する重音節構造を有している点に注意されたい(軽音節構造や曖昧母音を有する (4b) の接尾辞と比較されたい)。 (4a) に示した接尾辞は全て副次強勢を有しており、その調音上のエネルギー(intensity)は (4b) に示した接尾辞に比べて強いと推定されるが、さらに、(4a) に示した接尾辞は自身の構造的特性(音節構造、分節音の性質)からも聴覚的な卓立が産み出されていると考えられる。その結果、(4a) に示した接尾辞は (4b) に示した接尾辞よりも一層際立った卓立、いわば副次強勢を有していると知覚されるのではないか。

2. 2 単純語における副次強勢: 韻律的複合語

2. 2. 1 資料

前節にて概観した複合語と派生語はいずれも複数の形態素が関与する事例であったが、デンマーク語には単一の形態素からなるいわゆる単純語においても副次強勢の現れる例が確認されている。具体例を以下に示す:

- (5) a. *ÁrbEjde* 「仕事、働く」
 b. *ÁhOrn* 「楓」
 c. *ÁlkohOl* 「アルコール」
 d. *blÝAnt* 「鉛筆」
 e. *gÚitAr* 「ギター」
 f. *hÁngAr* 「飛行機の格納庫」
 g. *kÁviAr* 「キャビア」
 h. *kÓbOlt* 「コバルト」
 i. *pÁradls* 「楽園」

上に示した単純語は、筆者が韻律的複合語と呼ぶ⁽²⁾ものの具体例である。韻律的複合語は、単純語でありながら複合語や派生語においてむしろ典型的である副次強勢を有するのみならず、副次強勢が常に主強勢に後続する「主強勢+副次強勢」という複合語的な強勢型を有する点で特異である(これらの単純語を韻律的複合語と名づけた所以はここにある)。

見出し語として 41102 語を収録する *Molbæk Hansen* の発音辞典⁽⁶⁾から筆者が韻律的複合語と判断し、調査項目として抽出したのは 47 語。その内、インフォーマントから「(よく)知っている」や「実際に使用する」との報告を受け、かつ「主強勢+副次強勢」という型を確認することができたものは、全部で 42 語であった(稿末の表 2 を参照されたい)。

2. 2. 2 副次強勢の認定基準

ここで、韻律的複合語が真に副次強勢を有しているのか、換言すれば、韻律的複合語は「主強勢+副

次強勢」という型ではなく「主強勢+無/弱強勢」という型を有しているのではないのか、と疑問視する向きもあるかもしれない。この疑問に対して、筆者は以下の 3 つの点をもって韻律的複合語が「主強勢+副次強勢」という型を有すると判断する:

- (6) a. 主観的音声観察により得られる聴覚的卓立
 b. 音節量や母音の種類(完全母音か否か)
 c. 複合語に準ずる韻律的振る舞い

まず一点目の「聴覚的卓立」に関して。例えば、二音節語 *blÝAnt* 「鉛筆」では、主強勢を担う第一音節 *bly-* との比較(主観的音声観察)から第二音節 *-ant* の聴覚的な卓立の度合いが弱く、従って強勢の程度が低いと判断することは可能であるものの、*-ant* の強勢が「無/弱強勢」である可能性は未だ残される。そこで、例えば同じく二音節語である *dÁto* 「日付」と比較することで、*blyant* の第二音節 *-ant* が第一音節 *bly-* よりも卓立の度合いが弱く、しかしながら、*dato* の第二音節 *-to* よりも卓立の度合いが高いことが明らかとなり、ここから *-ant* が副次強勢を担っていると判断する。

続いて、副次強勢を担う音節の構造的特徴に関して。先述の「卓立」を聴覚的に捉える上で幾らか寄与していると考えられるが、副次強勢の有無を判断する上で手掛かりとして、音節量や完全母音か否かの別など当該音節の構造的特徴にも着目する。そもそもデンマーク語では、音節が強勢を担うには「非軽音節」(CV 音節以外)でかつ「完全母音」を含むという二つの制約を満たす必要がある。この点から、例えば *dÁto* の第二音節 *-to* や *hÁndel* 「貿易、取引」の第二音節 *-del* が「無/弱強勢」とであると判断するという点では *blÝAnt* の第二音節 *-ant* も *dÁto* の第二音節 *-to* や *hÁndel* の第二音節 *-del* に通ずるが、*-ant* が音節量と母音の種類で上述の制約を満たしているがために、副次強勢を担うと判断することができるのである。

最後に、複合語との類似性に関して。(5) に示した単純語は韻律的に複合語に通ずる振る舞いを示すことがあり、この点から複合語と同じく「主強勢+副次強勢」という型を有すると判断することができる。例えば、末尾強勢(oxytone)の語を前部要素とする「右枝分かれ構造」([A[BC]])の複合語を形成する際、後部要素である複合語は強勢の衝突を避けるリズム上の制約により、「主強勢+副次強勢」から「無/弱強勢+副次強勢」という型へと交替を示す⁽²⁾:

- (7) a. *ÓplUkker* 「栓抜き」(～*-oplUkker*)
 e.g. *’ØloplUkker* 「ビール瓶の栓抜き」
 **’ØlOplukker* (cf. *’Øl* 「ビール」)
 b. *Údkllp* 「切り抜き」(～*-sudkllp*)
 e.g. *avÍsudkllp* 「新聞の切り抜き」
 **avÍsUdklip* (cf. *avÍs* 「新聞」)

- etrangers*. Copenhagen: A.-F. Føst & Fils.【1822年 Ringkøbing の生まれ】
- b. Christiani, Emil (1888). *Rim-ordbog over en Del af de i det Danske Tale- og Skriftsprog Brugelige Ord*. Kjøbenhavn: G. E. C. Gad. [Reprint. Nabu Press, 2012]【1817年 Sjælland 東部の Køge の生まれ】
- c. Danske sprog- og litteraturselskab (1919- 1956). *Ordbog over det Danske Sprog*. København: Gyldendal.【以下 ODS と略す】
- d. Høysgaard, Jens Pedersen (1747). *Accentuered og Raisonerede Gramatica*. København: 出版社不詳. [Reprinted in Henrik Bertelsen, ed. (1920). *Danske gramatikere 4*. København: Gyldendal, pp. 129-488.【1698年 Århus の生まれ】
- e. Jespersen, Otto (1906). *Modersmålets fonetik*. København og Kristiania: Gyldendal.【1860年 Jylland 東部の Randers の生まれ】
- f. Meyer, Ludvig Beatus (1837). *Kortfattet Lexicon over Fremmede, i det Danske Skrift- og Omgangssprog Forekommende Ord, Kunststudtryk og Talemaader, tillige med de i Danske Skrifter Meest Brugelige Fremmede Ordforkortelser*. 出版地、出版社不詳. [Reprint. Meyers Frem-medordbog. København: Gad, 1998]【1780年ドイツの Gandersheim の生まれ】
- g. Michelsen, C. A. (1890). *Ekko af Dansk Talesprog*. 出版地、出版社不詳.【1842年 Jylland 北部の Thisted の生まれ】
- h. Mikkelsen, Kristian (1911). *Dansk Ord-føjningslære med Sproghistoriske Tillæg: Håndbog for Viderkomne og Lærere*. København: Lehmann & Stages Forlag.【1845年 København の生まれ】
- i. Sandfeld, Kristian (1923). *Sprogvidenskab: en Kortfattet Fremstilling af dens Metoder og Resultater*. Aanden udgave. København: Gyldendal.【1873年 Jylland 南の Vejle の生まれ】
- j. Verner, Karl Adolf (1903). *Afhandling og Breve*. 出版地、出版社不詳. [Reprint. Nabu Press, 2011]【1846年 Århus の生まれ】

上記の文献のうち、実際に筆者が参照可能であったものは次の九点: Broberg (1882), Christiani (1888), ODS, Høysgaard (1747), Jespersen (1906), Meyer (1837),

Mikkelsen (1911), Sandfeld (1923), Verner (1903)。

筆者がフィールドワークより採取した 42 項目の韻律的複合語の内、かつ第一音節以外の音節に主強勢を有していたことが文献に記されているものは以下の 12 語 (言及のある文献名も併せて記す) :

- (10) a. *asfÁlt*「アスファルト」: Christiani, Verner, ODS
 b. *billÁrd*「ビリヤード」: Broberg, Christiani, Meyer, Mikkelsen
 c. *dirÉkte*「直接的な」: Christiani, ODS, Jepsersen
 d. *februÁr*「二月」: Broberg, Christiani, Meyer, Mikkelsen
 e. *feminÍn*「女性的な」: Christiani, Høysgaard, ODS, Sandfeld
 f. *guitÁr*「ギター」: Broberg, Christiani, Meyer, Mikkelsen
 g. *hangÁr*「飛行機の格納庫」: Broberg, Christiani, Meyer, Mikkelsen
 h. *januÁr*「一月」: Broberg, Christiani, Meyer, Mikkelsen
 i. *kaviÁr*「キャビア」: Broberg, Christiani, Meyer, Mikkelsen
 j. *maskulÍn*「男性的な」: Christiani, Høysgaard, ODS, Sandfeld
 k. *objÉkt*「物体」: Michelsen
 l. *subjÉkt*「主題」: Michelsen

ここで注意すべきは、筆者が採取した韻律的複合語の全てがここで言及した文献資料に記録されているわけではないという点である。従って、(10) に示したものを除く韻律的複合語に関しては、飽くまでも、同様に第一音節以外の音節に主強勢の置かれる型をおそらく有していたであろうと推察するに過ぎない。しかしながら、韻律的複合語の一部が、その歴史においてかつて第二音節以降の音節に主強勢を有しており、そして現代に至る過程において主強勢が第一音節へと移動したという事実は、ここで引用した文献資料から明らかであると言えよう。

3. 3 同系等の言語 (方言) の資料から

既に言及した通り、過去の強勢型が文献資料に記録されている韻律的複合語はごく一部であり、従って、その他の韻律的複合語に関しては同様の史的变化を同じく経たと推察するに過ぎない。しかし、デンマーク語と親縁関係にあり、かつノルド語の古い特徴を比較的色濃く残していると推定される言語や方言から採取した共時的資料との比較を通じて、(文献資料において言及のある語も含めて) 韻律的複合

語のかつての強勢型を推定することが可能となる。

ここでは、ノルウェー語南西部方言の一つである Sandnes (サンネス) 方言^{*3} を取り上げる。Sandnes 方言は、例えばデンマーク語においては「共性 common gender」へと融合してしまっただけで「男性 masculine」と「女性 feminine」という文法性のカテゴリーが未だ保持されており、音韻的にはデンマーク語において曖昧母音(schwa; /ə/)へと収束した屈折語尾に/a/や/e/、/ɔ/等の区別を保持するなど、種々の面でノルド語の古語の特徴を残している。

筆者の採取したデンマーク語の韻律的複合語 42 語の内、Sandnes 方言において通時的に対応する(換言すれば同一起源)と推定される単純語は、これまでの調査で 19 語採取された。以下に示すように、19 語の内 15 語はデンマーク語の韻律的複合語とは異なり「無/弱強勢+主強勢」という型を有している(Sandnes 方言は音韻論的に有意義な音調(いわゆるピッチアクセント)を有する言語⁽¹⁾であるが、音調の標記は割愛する)：

- (11) a. *alibí[:]* 「アリバイ」
 b. *alkohól* 「アルコール」
 c. *arbÉid* 「仕事」
 d. *biljÁrd* 「ビリヤード」
 e. *dirÉkte* 「直接的な」
 f. *februÁr* 「二月」
 g. *feminín* 「女性的な」
 h. *gitÁr* 「ギター」
 i. *hangÁr* 「飛行機の格納庫」
 j. *januÁr* 「一月」
 k. *kaviÁr* 「キャビア」
 l. *maskulín* 「男性的な」
 m. *paradís* 「楽園」
 n. *satÝr* 「風刺」
 o. *sellerí[:]* 「セロリ」

上に引用した語の内、特に以下の 9 語はデンマーク語において対応する語が文献資料にも記録されており、注目に値する：*biljard, direkte, februar, feminin, gitar, hangar, januar, kaviar, maskulin*。この点から、おそらく上記の 9 語を除く他の全ての語に関しても、デンマーク語においてはかつては第一音節以外の音節に主強勢が置かれていたのではないかと推定することが可能である^{*4}。

*3 Sandnes 方言や本稿において引用する Sandnes 方言の資料に関しては三村(2014)⁽¹⁾を参照されたい。

*4 デンマーク王国領グリーンランドの首都(州都)ヌーク(Nuuk)では、土着の言語であるグリーンランド

3. 4 型の併用(ゆれ)から

筆者の唱える主強勢の移動を裏付ける第三の論拠として、現代デンマーク語における強勢型の併用(いわゆる「ゆれ」)を挙げることができる。言語変化の速度が個人間や世代間で差異が見られるとするならば、変化を遂げた新しい形と変化を遂げる前の古い形が同一の言語社会において併存する可能性は十分にあり、従って、ある形式の併用やゆれは言語変化の傍証として捉えることが可能である。

筆者の調査で採取された 42 個の韻律的複合語の内、以下の 7 個に「第一音節に主強勢のある型(新しい型)」と「第一音節以外の音節に主強勢のある型(古い型)」の併用が観察されている：

- (12) a. *Álibí[:]* ~ *alibí[:]* 「アリバイ」
 b. *hángA[:]r* ~ *hangÁ[:]r* 「飛行機の格納庫」
 c. *kÓbOlt* ~ *kobÓlt* 「コバルト」
 d. *ÓbjEkt* ['objekt] ~ *objEkt* [ɔb'jekt]
 (~ [ɔb'dzekt]) 「物体」
 e. *sÚbjEkt* ['subjekt] ~ *subjEkt* [sub'jekt]
 (~ [sub'dzekt]) 「主題」
 f. *tÁamI[:]l* ~ *tamí[:]l* 「タミル語」
 g. *ÚrbA[:]n* 【日刊紙名】 ~ *urbÁ[:]n* 「上品な」

なお、*objekt* と *subjekt* に関しては、古い型であると推定される強勢型を伴うと、おそらく借入元の言語であると考えられるフランス語的な [dʒ] を用いた発音にもなりうる点は注目に値する。また、*urban* のように強勢型の差異に付随して語義にも差異が見られる場合もある点に注意されたい。

3. 5 過去の主強勢の痕跡としての副次強勢

以上、筆者が韻律的複合語と呼ぶデンマーク語の一部の単純語が、主強勢の左方移動という史的变化を経て、かつての「無/弱強勢+主強勢」という強勢型から「主強勢+副次強勢」という型を有するに至ったであろうことを論じてきた。

ここで、現在の強勢型における副次強勢の位置付けが、未だ問題点として残る。というのも、単に

語の他、入植者の言語の一つであるデンマーク語も併用されている。ヌークには、第 3.2 節にて引用した文献資料が編纂されたと推定される時期とほぼ同時期(あるいはそれ以前)に、デンマークやノルウェー南西部から入植が始まっているため、言語地理学に基づき経験的に推察すれば、現在のヌークにおいて話されているデンマーク語には当時の強勢型が残存していると推定される。しかしながら、2013 年 8 月に筆者が実施した調査では、そのような古い強勢型は確認されなかった。

主強勢が左方向へ移動したのであれば、かつての「無/弱強勢+主強勢」という型から「主強勢+無/弱強勢」という型へと変化しても不思議ではないからである。

そこで筆者は、現代の強勢型における副次強勢がかつての主強勢の名残として現れている、という解釈を提案する。かつての主強勢を担っていた音節は、韻律上は主強勢を失いはするものの、分節音のレベルでは主強勢を担っていた段階での構造を保持している。既に述べた通り、デンマーク語では強勢を担う音節には音節量の点で制約があり、かつての主強勢を担っていた音節が保持する構造は強勢を担うに十分なものである。従って、この音節に強勢が置かれることは構造的に見て然るべき帰結であると言えることができるが、注意すべきは語は既に主強勢を一つ有しているという点である。既に言及した通り、主強勢は語（厳密には「アクセント単位」）に一つ存在することで語を韻律的に特徴付ける働きを果たすが、韻律的複合語の場合も、左方に移動したと推定されるものの、主強勢は既に存在しており、語全体を韻律的にまとめる働きをしている。従って、かつての主強勢を担っていた音節は、構造的には主強勢を担い得るものの、既に主強勢が存在している以上、主強勢を新たに担うことはできず、しかしながらその構造的強さ故に強勢は担うことが可能であり、結果として主強勢よりも度合いの低い副次強勢を担っていると考えられる^{*5}。

4 まとめと今後の課題

4.1 まとめ

以上、本稿では、筆者がデンマーク語において韻律的複合語と呼ぶ単純語の強勢型の史的側面について考察してきた。1700年代から1800年代にかけて出版された文献資料や親縁関係にある言語（方言）との比較、さらにはデンマーク語内部における強勢型の併用を論拠として、韻律的複合語が古くは「無/弱強勢+主強勢」という型を有していたが、その歴史の変遷の過程において「主強勢の左方移動」とアクセント変化を被ったと推定した。また、韻律的複合語において観察される副次強勢は、かつての主強勢を担っていた音節の卓立が保存された結果現れたも

*5 本節において筆者が展開した議論に関して、査読者の一名から、他言語において類似する現象が確認されれば筆者の議論の論拠となりうる旨、ご指摘をいただいた。今後、他言語の調査も進め、明らかにしていきたい。

のであると結論づけた。

4.2 今後の課題（その1）：アクセント変化の要因と類推的水平化

本研究では、共時的に韻律的複合語と位置づけられる一連の単純語がかつては第一音節以外の音節に主強勢を有していたが、現代に至る過程において第一音節へと主強勢が移動した、というアクセント変化の存在を主張した。

では、このようなアクセント変化は一体どのような要因で生じたのであろうか。古い強勢型と文献資料に関して言及した Brink ら⁽¹⁰⁾は、事実の記録に関してのみ言及しており、変化の要因に関してはまったく言及していない。そこで筆者は、アクセント変化の要因として「固有語のアクセントとの類推的水平化(analogical leveling)」を提案したい。

実は、これまで韻律的複合語と位置づけてきた単純語は、語源的には全て外来語である（低地並びに高地ドイツ語などノルド諸語以外のゲルマン諸語からの借入語もここに含む）。おそらくデンマーク語に借入された段階では第一音節以外の音節に主強勢を有していたが、デンマーク語に浸透するとともにその使用頻度が高まるにつれて、第一音節に主強勢を有する固有語の強勢型に合わせたものと考えられる。

なお、Jørgen Rischel (1969)⁽¹²⁾に倣い「固有語」を「【筆者補注: 700年頃から1350年頃にかけての】「古デンマーク語」から受け継いだ語と限定すれば、「固有語」は一ないし二音節の単純語と二音節以上の複合語を含めて全て第一音節に主強勢を有する語と捉えることができる。

第一音節以外の音節に主強勢を有しながら時代の経過とともに第一音節へと主強勢が移動する変化の傾向性は、複合語に関しては複数の研究者により指摘されている。例えば Axel Kock (1886)⁽¹³⁾によれば1700年代以前のデンマーク語の複合語は後部要素に主強勢を有するものが多く、時代が下るにつれて単純語（固有語）との類推から第一要素に主強勢の現れる傾向が強くなったという。

また、Eli Fischer-Jørgensen (2005: 4-6, 390-441)⁽¹⁴⁾は、現代デンマーク語において後部要素に主強勢を有する複合語が前部要素に主強勢を置いて発音される傾向があることを指摘しているが、筆者の調査でも同様の傾向性を確認することができた。(14)に示す複合語は Aage Hansen (1956)⁽¹⁵⁾など標準語の規範的な発音を扱った研究書において頻繁に引用される例であるが、先行研究の記述に反し、筆者のインフ

オーマントからは一貫して前部要素に主強勢を置く型が報告された（音声表記は割愛する）：

- (14) a. *gr'ØnlÁngkål* 【デンマークの伝統料理、付け合わせに用いる】 cf. *grønlÁngkål*
 b. *kÁlvenYresteg* 【デンマークの伝統的肉料理？】 cf. *kalvenYresteg*
 c. *stíftÁmtmand* 「知事、長官」【現代では用いられない官職名】 cf. *stiftÁmtmand*

以上、現代デンマーク語においては主強勢を第一音節（複合語であれば前部要素）に置く傾向が時代とともに強まりつつあると考えられ、第一音節に主強勢を有する典型的事例である固有語の強勢型に合わせる形で韻律的複合語もかつての主強勢を移動させたのだと推察することができる。

今後は、デンマーク語の語彙全体の中で第一音節に主強勢を有する語の割合を算出するなど、統計的数値を用いて類推的水平化の妥当性について検証していく必要がある。

4. 3 今後の課題（その2）：アクセント変化のメカニズムと変化の起こり易さ（難さ）

現代のデンマーク語には、*arbejde* や *kobolt* の様に筆者が仮定するアクセント変化を受けた（あるいはその途中段階にある）と考えることのできる語の他に、*porcel'Æn* 「陶器」や *balalÁjka* 「バラライカ【楽器】」のように第一音節以外の音節に主強勢を有する語（つまりはアクセント変化を受けていないと推定される）語も存在する。では、本研究で提案したアクセント変化には、語によってその適用のし易さに差異があるのだろうか。

そこで筆者は、亀井孝ほか (1966: 174)⁽¹⁶⁾における「群化」や、上野善道 (2002: 176, 186)⁽¹⁷⁾の「アクセントの意味表示機能」や「アクセント群化」という概念から着想を得て、語彙は意味や音形などの点から「グループ化」(grouping; Gruppierung: cf. Max Wertheimer (1923)⁽¹⁸⁾) され、そのグループとしてのまとまりが一種の「縛り」となってアクセント変化を妨げる（場合によっては促す？）のではないかと仮定する。

事実、デンマーク語においては「人名」や「アルファベット頭文字語」といった語の属性に対応して特定の強勢型が観察される⁽¹⁹⁾。また、同様の傾向はノルウェー語 Sandnes 方言や、第一音節に主強勢を置く傾向が著しく高いとされるアイスランド語においても観察される⁽²⁰⁾。従って、語が属するなんらかのグループがある特定の強勢型と対応関係にあり、

それがアクセント変化にも関与しうると仮定することは極めて妥当であろう。

では、「韻律的複合語」のアクセント変化にはいかなるグループ化が関わっているのだろうか。以下、現時点で筆者が仮定する2つのグループ化について概観する。

4. 3. 1 語源意識や馴染みの度合いに基づくグループ化

第4.2節の(14)では、伝統的に第一要素以外の構成要素に主強勢が置かれる複合語が、話者によっては第一要素に主強勢の置かれる型で発音されることを指摘した。これは、複合語の具体的に指し示す物が古いなどの理由から話者にとっての馴染みの度合いが低く、おそらく（音声ではなく）文字を通じて習得した語であるがために、その他の複合語との類推から複合語アクセント規則を適用してしまったためであると考えられる。

筆者は、同趣の類推現象が韻律的複合語におけるアクセント変化にも作用しているのではないかと考える。つまり、元来は外来語であり第一音節以外の音節に主強勢を有していた語が、話者の中で語源意識が薄れるとともに馴染みの度合いが高くなり、結果として固有語に特徴的な第一音節に主強勢のある型で発音するようになったのではないだろうか。

事実、韻律的複合語の多くは外来語とはいえ、低地ドイツ語や高地ドイツ語からの借入語が多く、フランス語やラテン語起源の借入語と比べると話者にとっての馴染みの度合いは高いと思われる。このことは、*avís* 「新聞」、*buffÉt* 「ビュッフエ」や *komplimÉnt* 「賛辞」、*soldÁt* 「兵士」、*sæsÓn* 「時期、シーズン」などフランス語起源の語が第一音節に主強勢を有していない事実からも裏付けられよう。

4. 3. 2 音形に基づくグループ化

例えば *fysík* 「物理学」や *lingvistík* 「言語学」、*matematík* 「数学」などは一様に最終音節に主強勢を有しているが、末尾の音連続が全て *-ik* という点で共通している。また、*kantíne* 「食堂」、*maskíne* 「機械」、*rutíne* 「決まりきった仕事」、*Ukráíne* 「ウクライナ」などは一様に次末音節 (penultimate syllable) に主強勢を有しているが、末尾の音連続が全て *-ine* という点で共通している。

このように、筆者の唱えるアクセント変化を受けていないと推定される語は音形の点でグループを形成しており、このグループとしてのまとまりがアクセ

セント変化の適用に抗う力として作用しているとは考えられないだろうか^{*6}。

その一方で、グループ化がアクセント変化を促したのではないかと考えられる事例もある。既に本稿で引用した *gÚitAr*, *hÁngAr*, *jÁnuAr*, *kÁviAr*、またこれらに準ずる *fÉbruAr* 「二月」や *c'Æsar* 「カエサル」などの語は、全て *-a[.]r* という音連続を末尾に共有する点でグループを成すと言えるが、この場合はアクセント変化を経ていると推定される。おそらく、*-a[.]r* という音形を有するある語に起こったアクセント変化が、同一の音形を有する（つまり同一のグループに属する）他の語にも伝播し、全体としてアクセント変化を被ったとは考えられないだろうか（ここから、*vikÁ[.]r* 「代理」の様に同一の音形を有しながらも未だ第一音節以外の音節に主強勢を有する語も、おそらくいずれはアクセント変化を受けるのではないかと推定される）。

語の「グループ化」がアクセント変化の適用を妨げるのかあるいは促進するさせるのかに関しては今後の研究を俟たざるを得ないが、いずれにしても、音形に基づくグループ化がアクセント変化に何らかの形で関与していることは明らかではないだろうか。

語彙のグループ化の概念をもって全てのアクセント変化を説明できるわけではなく、また未だ様々な課題を残す概念ではあるが、アクセント変化を説明する上で有益であり、また何らかの形でアクセント変化に関与していると推定することは妥当であろう。

今後は、デンマーク語にはいかなるグループ化があり得るのか^{*7}、またグループ化以外にアクセント変化の起こり易さに関与する要因はないか（例えば、主強勢の移動先、つまりは現在の主強勢を担う音節の構造や音節量など）、広く様々な要因を探索していく必要がある。

また、本研究で参照した文献資料からは韻律的複合語の過去の強勢型を窺い知ることが可能であって、いつ頃現在の強勢型へと変化したかに関しては読み

取ることができない。参照すべき文献の範囲を広げるとともに、韻律的複合語の語源も考慮に入れながら、本発表で唱えるアクセント変化の発生時期も明らかにする必要がある。

謝辞

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」第3回研究発表会（2013年11月22日：神戸市外国語大学）において行った口頭発表並びに配布資料の内容に加筆と修正を加えたものである。同口頭発表に有益なコメントをくださった窪菌晴夫教授、上野善道教授、三間英樹教授、及び聴衆諸氏に心よりお礼を申し上げる。

また、本研究の資料の一部は、デンマーク王国領グリーンランドの首都（州都）ヌークにおいて実施したフィールドワークにより採取した（2013年8月）。同実地調査は「室蘭工業大学21世紀科学研究費」（種目A）による資金援助を受けて実施した。佐藤一彦室蘭工業大学学長、並びに同研究費の審査に携わった方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。

引用文献

- (1) Basbøll, Hans (2005). *The Phonology of Danish*. Oxford: Oxford University Press.
- (2) Mimura, Tatsuyuki (2008). "Prosodic compounds and the interpretation of secondary stress in Danish." 日本音韻論学会編. 『音韻研究』第11号. 東京: 開拓社, pp. 19-26.
- (3) Mimura, Tatsuyuki (2003). "Stress accent in Danish." 『東京大学言語学論集』22, pp. 259-291.
- (4) Mimura, Tatsuyuki (2004). "Aspects of Danish syllable structure." 『東京大学言語学論集』23, pp. 159-202
- (5) Mimura, Tatsuyuki (2009). *Issues in Danish Word-Prosody: A Synchronic Description*. 未刊行博士学位請求論文: 東京大学.
- (6) Molbæk Hansen, Peter (1990). *Dansk Udtale (Udtaleordbog)*. København: Gyldendal
- (7) Fudge, Erik C. (1984). *English Word-Stress*. London: George Allen & Unwin.
- (8) Hansen, Erik and Jørn Lund (1983). *Sæt tryk på: syntaktisk tryk i dansk*. København: Lærereforeningernes Materialeudvalg.
- (9) Basbøll, Hans (1995). "Degrees of stress in Danish: primary, secondary and tertiary." Eds., Jørgen Rischel, H. Basbøll. *Aspects of Danish Prosody (RASK Supplement Vol. 3)*. Odense: Odense University Press, pp. 21-47.
- (10) Brink, Lars, Jørn Lund (1975). *Dansk Rigsmål 2: Lydudviklingen siden 1840 med særligt henblik på sociolekterne i København*. København: Gyldendal.
- (11) 三村竜之 (2014a). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネ

*6 なお、*fysik* などの事例は、「学問の名称」といった「意味に基づくグループ化」が働いている可能性もあると考えられる。後述の注7も参照されたい。

*7 例えば「意味に基づくグループ化」。「キリスト教」にまつわる語は第一音節以外の音節に主強勢を有するものが多く、宗教が持つ保守的な性格が関与しているとは考えられないだろうか。

- ス) 方言における音調のアクセント論的解釈]. 『室蘭工業大学紀要』第 63 号, pp.77-91.
- (11) 三村竜之 (2014a). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言における音調のアクセント論的解釈」. 『室蘭工業大学紀要』第 63 号, pp.77-91.
- (12) Rischel, Jørgen (1969). “Morpheme stress in Danish.” *Annual Report of the Institute of Phonetics, University of Copenhagen* 4, pp. 111-144.
- (13) Kock, Axel (1886). “Historiska anmärkningar om dansk akcentuering.” *Arkiv för nordisk filologi* 3, pp. 42-82.
- (14) Fischer-Jørgensen, Eli (2001). *Tryk i ældre dansk: Sammensætninger og afledninger*. Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab. Historisk-filosofiske Meddelelser 84. Copenhagen: C. A. Reizel.
- (15) Hansen, Aage (1956). *Udtalen i moderne dansk*. København: Gyldendal.
- (16) 亀井孝, 河野六郎, 柴田武, 山田俊雄 (1966). 『言語史研究入門』(日本語の歴史 別巻). 東京: 平凡社.
- (17) 上野善道 (2002). 「アクセント記述の方法」. 飛田良文, 佐藤武義編. 『現代日本語講座 第 3 巻 発音』. 東京: 明治書院, pp. 163-186.
- (18) Wertheimer, Max (1923). “Untersuchungen zur Lehre von Gestalt II.” *Psychologische Forschung* 4, pp. 301-350.
- (19) 三村竜之 (2007). 「デンマーク語アルファベット関連語彙の音韻論」. 『東京大学言語学論集』26, pp.1-20.
- (20) 三村竜之 (2014). 「アイスランド語ストレスアクセント試論」. 『日本言語学会第 148 回大会予稿集』, pp. 158-16.

表 2 韻律的複合語一覧 (付: 文献資料における記録の有無、対応する Sandnes 方言の資料)

	韻律的複合語	文献記録	Sandnes 方言における主強勢の位置	
			第一音節	第一音節以外
1.	<i>ádvènt</i> 「降臨節」		<i>ádvènt</i>	—
2.	<i>ágèns</i> 「主体」		—	—
3.	<i>áhòrn</i> 「楓」		<i>áhorn</i>	—
4.	<i>álibì~alibí</i> 「アリバイ」		—	<i>alibí</i>
5.	<i>álkohòl</i> 「アルコール」		—	<i>alkohól</i>
6.	<i>ámbòlt</i> 「鉄床」		—	—
7.	<i>árbèjde</i> 「働く、仕事」		<i>árbeid</i>	<i>arbéid</i>
8.	<i>ásfált</i> 「アスファルト」	有り	—	—
9.	<i>blýánt</i> 「鉛筆」		<i>blýant</i>	—
10.	<i>bíllàrd</i> 「ビリヤード」	有り	—	<i>biljárd</i>
11.	<i>Césàr</i> 「カエサル【人名】」		—	—
12.	<i>dírèkte</i> 「直接的な」	有り	—	<i>dirékte</i>
13.	<i>léksìòn</i> 「辞典」		<i>léksikon</i>	—
14.	<i>fébruàr</i> 「二月」	有り	—	<i>február</i>
15.	<i>féminìn</i> 「女性的な」	有り	—	<i>feminín</i>
16.	<i>gúitàr</i> 「ギター」	有り	—	<i>gitár</i>
17.	<i>hángàr~hangár</i> 「格納庫」	有り	<i>hángar</i>	<i>hangár</i>
18.	<i>ímplicìt</i> 「暗黙の」		—	—
19.	<i>Íràk</i> 「イラク」		—	—
20.	<i>Íràn</i> 「イラン」		—	—
21.	<i>jánuàr</i> 「一月」	有り	—	<i>január</i>
22.	<i>káviàr</i> 「キャビア」	有り	—	<i>kaviár</i>
23.	<i>kéftir</i> 「ケフィア(発酵飲料)」		—	—
24.	<i>kóbolt~koólt</i> 「コバルト」		—	—
25.	<i>lómviè</i> 【海鳥の一種】		—	—

26.	<i>mártÿr</i> 「殉教」		—	—
27.	<i>máskulín</i> 「男性的な」	有り	—	<i>maskulín</i>
28.	<i>nápalm</i> 「ナパーム弾【焼夷弾の一種】」		—	—
29.	<i>páradís</i> 「楽園」		—	<i>paradís</i>
30.	<i>Pórtugàl</i> 「ポルトガル」		—	—
31.	<i>óbjèkt</i> ~ <i>objékt</i> 「物体」	有り	—	—
32.	<i>prásèns</i> 「現在時制」		—	—
33.	<i>própolis</i> 「プロポリス」		—	—
34.	<i>sártÿr</i> 「風刺」		—	<i>satÿr</i>
35.	<i>séllerì</i> 「セロリ」		—	<i>sellerí</i>
36.	<i>stándàrd</i> 「水準」		—	—
37.	<i>súbjèkt</i> ~ <i>subjékt</i> 「主題」	有り	—	—
38.	<i>súltàn</i> 「スルタン【イスラム教国の君主】」		—	—
39.	<i>támìl</i> ~ <i>tamíl</i> 「タミル語」		—	—
40.	<i>úràn</i> 「ウラン」		—	—
41.	<i>úrbàn</i> 【新聞名】 ~ <i>urbán</i> 「洗練された」		—	—
42.	<i>yóghùrt</i> 「ヨーグルト」		—	—